



北中生へ 最近、感じたこと

地域に住む元校長先生からの言葉

先週、地域に住む元校長先生からこのようなメッセージが届いた。

「今朝、自宅から上北小方面に車で走行中、横断歩道で一旦停止したら、北中の生徒が礼儀正しく頭を下げて渡って行きました。気持ちが良かったです。中3生公民館教室でも北中の生徒は明るく笑顔が素敵な生徒が多いと思います。元気をもらいます。」

北中に来てもうすぐ2年が経とうとしている。私もこのメッセージと同じことを感じている。北中生は明るく笑顔がいい。一緒にいて、気持ちがいい。そして、元気が出る。それは、北中生一人ひとりの性格が一番にあると思うが、それだけではない。仲間との絆。何事にも前向きに取り組む姿勢。豊かな自然に恵まれた地域。そして、いつも温かい家族。いろんな要素が混ざり合って、今の北中生があると思う。

これからもずっと、地域の人から愛される北中生であってほしい。

“生きる”～愛犬ラブの死から～

我が家は先週までオスのミニチュア・ダックスフンドと一緒に暮らしていた。愛犬の名前はラブ。ラブは1月31日(土)、午後6時30分、17年3ヶ月の生涯を閉じ、天国に旅立った。今回は愛犬ラブの死から生きることについて書いてみる。

ラブは死の2日前から食が細った。自分で歩くことができなくなった。すっかり弱り、寝たままになってしまった。しかし夜になると寝たまま、ずっと力強く吠え続けた。昼間、あんなに弱っていたのに…その姿を見て「まだ、力が残っている」私たち家族は奇跡の回復を祈った。

死の1日前。何も食わず、何も飲まなくなった。依然、寝たまま。そしてその夜。何度か吠えた。翌朝、家族とあんな声を初めて聞いたと話した。17年以上一緒にいて初めて聞いた声だったのだ。その声は死を悟ったラブが最後の力を振り絞って、「まだまだ」と自らを奮い立たせる声のようだった。また、死を覚悟した私たちに、「勝手に死ぬと思うなよ！」という怒りの声にも思えた。

そして、1月31日(土)。やはり朝から何も食べない。飲まない。目もうつろになった。大分市に住んでいる息子と呼んだ。息子は数時間ラブの側について、体を撫で続けた。そして息子が大分市に帰って行った3時間30分後…ラブは静かに旅立った。

その顔は穏やかで、普段寝ている表情と変わらなかった。とても命が果てていると姿とは思えない。今すぐに起きて、「お腹がすいたよう。ご飯を食べたいよう。」とおねだりしそうな表情だった。

数日間、死が迫っても、ラブは生きることを決して諦めなかった。きっと、「1日でも、1時間でも、1分でも、1秒でも長く生きてやる」と生きることだけを考えていたに違いない。その姿から、生き物がもつ、“生き続けようとする”凄まじい本能を感じた。

自ら歩くことも、食べることも飲むこともできないのに、懸命に生き続けようとしたラブ。その姿を目の当たりにした私はラブに誓った。「これからの人生、何があっても生きることが絶対諦めない。残りの人生、ラブのように懸命に全力で生き抜いてやる。」

そして、再びラブに会った時、こう言いたい。「ありがとう。俺も全力で生き抜いたぞ。さあ、一緒に散歩に行こう！」と。

